

「東山文化」

——その言説の成立——

川嶋 将生 (立命館大学文学部教授)

E-mail: k-shima@lt.ritsumei.ac.jp

はじめに

「東山文化」と人口に膾炙している用語について、以前、その用語がはたして、その時代の文化の実態をふまえた妥当なものであるのかどうか、疑念を挟んだことがある。疑念は、足利六代将軍義教期の文化を評価するなかから導きだされたもので、「彼が(足利義教。引用者注)レールを敷いた官僚制度、文芸をはじめとする幕府行事、あるいは彼によって集められた唐物、そうしたすべてが義政へとうけつがれた。そしてそれらが東山文化と呼ばれる文化の核を成したとすれば、東山文化もさることながら、その核となったもののさらなる分析が必要と思われる」⁽¹⁾とした。そうした考えのもと、1995年の大学院における講義において、「東山文化」や「北山文化」が、歴史用語として用いられてくる背景についての私見を述べたこともある。

義教期文化への高い評価は、何も私が最初に提起したものではなく、何名かの先学の方々がすでに指摘されており、特に村井康彦氏などは、義教期文化の重要性を主張するとともに、「この北山と東山の間に位置する義教の時代のもつ文化史上の意味がもっと重視されてしかるべきもの」「近時私は、東山時代はともかく、東山文化という文化概念にはいささか懐疑的であり、したがって文化史上の時代概念として東山文化(時代)を措定することには消極的、という以上に否定的である」とまで述べられていたのだが⁽²⁾、そのことについては、上に述べた以前の拙論でふれたところだから、ここでは再説しないことにする。本稿ではそうした義教期文化の重要性と「東山文化」概念への疑念の提起が、早くから行われていたことだけ

を確認しておけば十分だろう。

これから本稿で論じようとするのは、いま述べた議論と十分に関連するのだが、義教期文化について再説するのではなく、むしろ日本文化史研究のなかで、果たして、「東山時代」とされる足利八代将軍義政の時代が、いつ頃から、そして何故、文化史上、重要であると認識され、注目されるようになったのか、また「東山文化」の概念が歴史研究上、いつ頃から用いられるようになったのか、を検証することを主な目的とする。「東山文化」とくれば、当然「北山文化」についても論じなければならないのだが、実は「北山文化」という語の出現は、むしろ「東山文化」に対置する用語として生まれたものである。その意味ではむしろ、「東山文化」語の出現を論じることによって、おのずと「北山文化」語の問題にも言及していくことになる。

なお室町時代に成立したこれらの文化形態を、「北山文化」「東山文化」などと区分することなく、「室町文化」と一括して把握しようとする近年の研究動向に、私は賛意を表する立場であるが、このことを含めて「東山文化」概念が研究史上に提起されてくる問題や経過について、末柄豊氏が的確な研究の整理を行っており、その末柄氏の整理には、異論はない⁽³⁾。したがって本稿はそうした先学の成果に、屋上屋を重ねる議論となることを恐れるが、しかし、いまだ触れられていない課題も幾つかあるため、それらを含めて、本稿では上述の問題について改めて考えてみることにする。

1. 「東山文化」概念の出現

順序として、まず「東山文化」の語がいつ頃か

ら歴史書のなかに登場するようになったのかを確認しておこう。やや羅列的になるが、日本史辞典ではどのような扱いとなっていたのであろうか。

まず明治41年（1908）に吉川弘文館から刊行され、大正4年（1915）に増訂版が出された『大増訂国史大辞典』には、「東山文化」「北山文化」の項目はなく、それどころか、「室町文化」の項目もない。辞書に項目として立てられる語は、その時代の研究水準に照らして検討され、立項されたものであるはずで、その意味では明治末年のこの頃には、室町時代の文化については、ほとんど注意が払われていなかったものと考えられる。ただし、「東山殿」「北山院」については立項されている。

次いで1940年から43年にかけて出版された富山房の『国史辞典』は、その内容の水準の高さが現在もお注目されているが、しかしこの『国史辞典』は、「し」項まで刊行されたものの、以後の項目は残念ながら刊行されることはなかった。したがって「ひ」に含まれる「東山文化」は、当然のことながら未刊行となったのだが、刊行された分に含まれる「き」項には、「北山文化」の項目もない。さらにいえば、昭和35年（1960）から刊行されはじめられた『日本歴史大辞典』（河出書房新社刊）には、「東山時代」項のなかで、文化の問題にも言及されるが、「東山文化」の項目はないのである。それがようやく辞典中に登場するのは、1966年に刊行された『角川日本史辞典』（角川書店）で、本辞典には、「北山文化」「東山文化」二つの項目が掲載されるのである。

では、著書・論文ではどのようなになっているのだろうか（以下、波線は断らない限り引用者による）。

まず1928年に出版された笹川種郎『東山時代の文化』（創元社）は、「東山時代の文化」に着目した初期の業績で、そこで氏は「東山時代の文化は即ち此の茶道文化で、そこに近世文化史の序幕が開かれる」と述べているように、近世文化の前提として「東山文化」を位置づけ、かつ茶道文化を最大の特徴と見なしているところに、大きな特徴

がある。つづいて、森末義彰『東山時代とその文化』（秋津書房、1942＝昭和17）の「東山文化の基調」一、「皇室と東山文化」には

東山時代に限らず、武家時代を通じて、わが皇室は、本来あるべきすがたにあらせられたとは申されない。わが国の本来あるべきすがたは、天皇が政治といはず、また文化といはず、すべての中心にあらせらるべきはずのものである。（中略）後花園天皇・後土御門天皇は、御ともに天資ことにすぐれさせ給うことは申すまでもない。国内が前古未曾有の混乱困窮の時に御位にあらせられながら、つねに国民の先頭に立つて、文化の進むべき道を示し給うたのである。（中略）即ち要言すれば、東山文化は、公家の文化の基礎の上に立つた武家の文化であり、さらに進んで公武の文化が渾然と融合したものであつたといへるわけである。（99p～130p）

と「東山文化」の用語を用いるとともに、その特質を、「公武の文化が渾然と融合したもの」と規定している。

次いで芳賀幸四郎『東山文化の研究』（河出書房）は、1945年に刊行されたものだが、芳賀氏は1941年から「東山文化」語を用いて論文を執筆されており、その意味では「東山文化」を歴史用語としてもっとも早くに用いた研究者の一人であったといってよからう。同書「序」のなかで氏は、

だが、それにしても、国体の本義から逸脱した暗黒時代と通念される室町時代や、將軍義政の自棄的な奢侈生活を地盤として成立したとされる東山文化の研究に値ひする理由が、更にひとびとによつて問はれるであらう。（中略）およそ、皇国の歴史の主体は、天皇を中心とし奉る日本民族の悠久一貫の大生命である。（中略）そして室町時代は正に一つの危機的時代であつただけに、却てよくこの国史の本質を露呈した時代といふべく、単なる道義的批判の立場をこえた広い歴史学的立場から新しい眼をもつてみらるべき時代である。私

が室町時代と東山文化の研究に力をつくして悔いないのは、一つには正にそのためである。

と、「東山文化」研究の意義を述べているのである。

このように概観してくると、義政時代への注目は、その時代が応仁・文明の乱を挟んで、いわゆる下克上の時代へと突入した、混乱する時代であったこと、そして森末・芳賀両氏とも、そうした時代と、太平洋戦争に突入した昭和17年頃とが、混乱ということでは共通した時代と認識されたこと、しかしそうした時代であったからこそ、「国史の本質を露呈」した時代であったと捉えたことが、その背景にあったことが知られる。このことは十分に把握しておいた方がよいだろう。

その後、さらに永島福太郎『中世の民衆と文化』（創元社、1956）では、「室町文化」（北山文化・東山文化）、林屋辰三郎「東山文化」（『岩波講座日本歴史』1963）とつづくのである。つまりまず、1940年頃から東山文化概念の提示があり、のちそれに対置される概念としての「北山文化」が提示されるわけで、先にものべたように、「北山文化」の用語提示は、あくまでも「東山文化」の対置概念としてであったのである。

しかし「東山の時代の文化」が注目されるようになったのは、この時が最初ではなかった。実はもっと早くに、この時代への眼が注がれていたのである。

2. 「東山時代」への照射

まず義政時代の文化に対する注目が、いつごろから、どのようなことを契機として行われるようになったのかを、幾つかの事例をあげながらみていくことにしよう。最初に掲げるのは、茶人山上宗二が書き記した『山上宗二記』（天正16=1588）の、冒頭の部分である⁽⁴⁾。

夫御茶湯之起者、普^(廣)光院殿・鹿菌院之御代ヨリ御唐物同ク御絵讃等歴々集畢ヌ、其比者御同朋衆

善阿弥・毎阿弥也、両公方様御他界之後、桂雲院殿十三之御年御落馬故御短命也、其後、東山慈照院殿御代ニ悉御名物寄給畢ヌ、

唐物が足利義満（鹿菌院殿）・義教（普廣院殿）の代より集められ、義政（慈照院殿）の時代にはさらに名物が悉く集められたことから書きはじめられ、次いで

又被仰出者、昔ヨリ有来遊者早事モ尽キヌ、（中略）何か可有珍敷御遊カナト御詮之 節、能阿弥謹而致得心首ヲ下ル、有良暫其憚不顧申上候、サレハ楽道之上者御茶湯ト申事御座候、南都皇明寺ニ珠光ト申者此御茶湯ニ卅ケ年抛身上、一道ニ志シ深キ者ニテ候、其次ニ件ノ廿ケ条ノ様子其外孔子聖人之道モ学ヒ珠光ト相談ノ密伝口伝不残悉申上候、

と、義政と侘び茶の湯の祖といわれる村田珠光とが会うに至った経緯が述べられる。さらに

公方様御感即珠光ヲ被召上、師匠ト被定置、御一世之御楽ハ此一興也、

と、珠光が義政によって茶の湯の師匠と定められたことを述べるのである。つまり千利休によって大成される侘び茶の湯は、村田珠光が足利義政によって登用されたことにより隆盛をみるに至った、との見解が示されるのである。

かつてその実在さえ疑問視されていた珠光であり、永島福太郎氏をして「珠光在世を証明する唯一の史料の『山科家礼記』の点検だけでも、数か月を要した」⁽⁵⁾と言わしめた彼の存在であるが、近年は彼の活動は幾つかの史料によって確認することができる。しかしそれでもなお、八代将軍足利義政と村田珠光との関係は、やはり永島氏が述べるように、珠光の「一休参禅説といい、東山山莊参仕説といい、確証は見当たらない」のである⁽⁶⁾。それがこのように主張されるのは、まず侘び茶の湯の始祖としての村田珠光の存在の主張と、その

珠光が生きた時代の意味づけが、侘び茶の湯を権威づけるためにも、後世の人びとにとっては、ぜひとも必要だったからである。『南方録』「覚書」にも⁽⁷⁾

宗易の物がたり、珠光の弟子、宗陳、宗悟と云人あり。紹鷗はこの二人に茶湯稽古修行ありしなり。宗易の師匠は紹鷗一人にてはなし。(中略)また道陳と紹鷗、別して問よかりければ、互に茶の吟味どもありしなり。宗易は与四郎とて十七歳の時より専茶をこのみ、かの道陳にけいこせらる。道陳引合にて紹鷗の弟子になられしなり。

と、武野紹鷗を介して、利休を村田珠光へと結びつけていく思考がみられる。したがっていま述べた意味づけとは、侘び茶の湯の始祖としての村田珠光は、将軍と密接な関係があり、将軍の取り立てによって茶の湯の師匠になったこと、であり、そのことはつまりは、義政こそ、侘び茶の湯のよき理解者であったことを示すことになるのである。

芸能世界における義政時代への回帰は、茶の湯ばかりのことではない。香道においても同様なのである。

西三条内府公、以東山泉殿禁裏へ香道御回事者、実隆公也⁽⁸⁾、

志野宗信 俗名三郎左衛門宗信、入道シテ名乗ヲ以テ法名トス、東山義政公ノ近習、京四条ニ住ス、実隆公ニ随テ香道ヲ極、又哥道ヲ玩ヒ茶道ヲ嗜、大永三年八月死、行年七十九⁽⁹⁾、

義政時代、あるいはその少し後まで活躍し、香道御家流の祖として位置づけられる三条西実隆は、実は香の世界とはほとんど関係がなかったことは、彼が遺した膨大な日記『実隆公記』をみても明らかであることは、いまや通説となっていようが⁽¹⁰⁾、彼がそうした位置づけをされたのは、江戸時代になり、香道のなかで主流的位置を占めた

源氏香と深く関わってのことである。つまり実隆は、15世紀後半、和学の大家として源氏物語をはじめとする古典に精通しており、公家だけではなく武家からも多く指導を要請されていた、という事実がある。こうした実隆の当時の活躍が、のちに香が香道として大成される時、香道の祖として仰がれるに至ったものであろう。

あるいは香道志野流の祖とされる志野宗信も、少なくとも、義政の近習であったとする、左に引用した『香道軌範』の叙述を裏付ける史料は存在しない。香道が茶の湯とともに発展していったこと、そしておそらく三条西実隆と同時代の活躍とする位置づけが必要であったのであろう。いずれにしても、芸能世界における義政時代への回帰の動きが、16世紀後半から17世紀にかけてすでにはじまっていたのである。

芸能世界ばかりではなく、絵画においても同様の事例がみられる。次に示すのは文禄～慶長頃(16世紀最末期)に成立、画家長谷川等伯が本法寺日通上人との間に交わした画事に関する談話記録『等伯画説』の一節である⁽¹¹⁾。

一、顔輝ガ百猿公トテ卷物ニシテ渡ス也、東山殿御秘蔵ノ絵也、猿公カキ也、作ノ物ゾ、
一、東山殿ニ八百カザリ有之、一切ノ唐絵ト云唐絵、并見事ナル物ハ、皆東山殿ノ御物也、

画家としての立場から、等伯の関心はおのずと絵画に向けられているが、多くの唐絵が義政のもとに集められ、「東山殿の御物」として珍重されていたことが述べられている。ここには直接的な表現はみられないが、唐絵を中心とした絵画世界においても、また唐物収集においても、義政の果たした役割の大きさを評価する姿勢が、言外に語られていることを読み取ることは容易なことだろう。そしてそのことが、義政時代への評価へと結びついているのである。この「東山御物」については、佐藤豊三氏によって、「東山御物」に押された鑑蔵印「雑華室印」は、義政のものではなく義教のもので、したがってそれらは義教時代の収

集品であることが明らかにされ、義政はそれを父義教から受け継いだだけにすぎないことが指摘されてから、はや30年が経つ⁽¹²⁾。冒頭に記した村井康彦氏の義教時代への文化的評価は、こうした事実も踏まえてのことなのである。

この点に関連してさらにいえば、將軍の側近くに仕えて、かつては芸術家集団のように評価されていた同朋衆は、現在では一部の同朋衆を除いては、けっしてそのような集団ではなかったことが明らかにされているが⁽¹³⁾、同朋衆に対し、芸術家集団的な評価が行われるようになった要因のひとつに、能・芸・相の、いわゆる三阿弥の存在がある。そしてその三阿弥の活躍が義政時代と重なり、さらにいえば、義政によって登用され各地でその腕を振るった作庭家、河原者善阿弥の活動などもあって、あたかも義政時代が芸術の時代であるかのような評価へと結びついていった。

3. 「名物」に対する評価

ではなぜこうした動きが16世紀後半からはじまったのであろうか。それは、おそらくはこのころからの侘び茶の湯の発展とともに、道具や古筆に対する関心が高揚していったことと、無関係ではなからう。

古筆が茶の湯の世界で珍重されることになった点については、侘び茶の湯中興の祖といわれる武野紹鷗が、茶掛けをそれまでの唐絵や墨跡から、和歌や歌書を用いることになったことが、大きな契機となったとの見通しを、以前述べたことがある⁽¹⁴⁾。古筆についても、先人の手跡を愛でる風は、もちろん古くから存在するが、その先人の手跡の意として古筆の語が現れるようになるのは、実隆頃からであることも、そこで述べた。例えば古筆についていえば、『実隆公記』延徳2年(1490)閏8、15条に「竹園古筆櫃一合返上之」とあって、実隆は古筆に対する強い関心をもっていたことが知られるが、それが茶の湯の世界の動向と相まって、16世紀後半から古筆に対する積極的な意味が付与されていき、それが最終的には元和末年(17

世紀前半)といわれる、家としての古筆家の成立に結びついていくのである⁽¹⁵⁾。

問題は古筆ばかりではない。以上のような動向が顕著となる時期、それまでうち捨てられてきたり、また人びとの関心を寄せられることもなかった物(道具など)が、新たな価値観によって発掘されたり、再発見されたりする、といったことが行われるようになってきた。そしてそうした行為を象徴的に示すのが、「掘り出し」なる語の出現であろう。「掘り出し」については、すでに『日葡辞書』に、「新たに見つけ出された、すなわち、掘り出された茶の湯の道具、細工物」とあり、また『日葡辞書』と同時期の慶長初年に刊行された『犬枕』の「嬉しき物」の項にも、「町買の掘り出し」とあって、そうした行為が、いかにこのころから人びとの間に浸透していたのかが理解できる。

「掘り出し」は、辞書にみられるだけではなく、実際、公家たちの行為にしばしば見られたことは、鹿苑寺住持鳳林承章の日記『隔莫記』やその他によって知ることができるが⁽¹⁶⁾、それは『犬枕』や『隔莫記』にもしばしば記されているように、町に出かけて行って、そこで新たな価値を付与された道具類を「掘り出し」たのである。そしてその行為は、『犬枕』にも登場するところを見ると、公家たちだけに限られた行為ではなく、おそらくは町人たちをも含みこんだ、広範な行為であったものと推測されるのである。

おわりに

義政を中心とする東山時代が理想化された最大の要因は、安土桃山時代以降、隆盛を迎えた侘び茶の湯の世界で、その大成者としての利休の評価や、それと関わっての村田珠光の位置づけ、さらには「掘り出し」の語によって代表される新たな価値観が創出されるなかで、とりわけ『等伯画説』にみられる「東山御物」に対する評価の問題が横たわっていた。加えて「東山御物」について三阿弥を初めとする同朋衆の関与が大きく位置づけられるなかで、さらに八代將軍義政の文化像が肥大

化していったものと考えられる。

かつて、よく主張されていた義政の政治の世界から逃避した隠遁生活と、それに付随する文化生活、とりわけ前者の隠遁生活については、近年の義政時代の政治史的再検討によって、ほぼ否定されたといつてよい⁽¹⁷⁾。この問題については、本稿の主題から逸れるため詳述はしないが、これまでの、義政のこうした隠遁生活と茶・花・香などを初めとする生活文化との関わりについては、あまりにも過大に評価されていたというべきだろう。私などは、むしろそうした文化の形態は、その後の天文期を中心とする、いわゆる天文文化期に確立するものと考えている。つまり「東山文化」「北山文化」を個別に切り取って理解するよりも、上述したように、もう少し相互の関連性を重視して理解することの方が、より一層、その時代の文化の特質を把握することができるものと思われる。そうした意味で私などは、「室町文化」と規定しての理解が、さらにふさわしいものと考えている。

注

- (1) 「足利義教とその文芸」(拙著『中世京都文化の周縁』思文閣出版、1992)
- (2) 村井康彦著『乱世の創造』(『日本文明史』5、角川書店、1991)
- (3) 末柄豊「室町文化とその担い手たち」(『一揆の時代』日本の時代史11所収。吉川弘文館、2003) また家塚智子氏も『室町文化史論』(2003年1月、奈良女子大学提出学位論文)中に「東山文化」をめぐる言説について」を設け、この問題に言及されている。
- (4) 熊倉功夫校注『山上宗二記』(岩波文庫、2006)所収、翻刻「表千家本山上宗二記」。
- (5) 永島福太郎著『初期茶道史覚書ノート』「あとながき」(淡交社、2003)。
- (6) 注(5)所収「珠光研究」25頁。
- (7) 西山松之助校注、『南方録』(岩波文庫、1986)
- (8) 「御家流香道掟書」。「御家流香道掟書」は、文化元年五月の奥書をもつ。東北大学狩野文庫

本。藝能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第10巻「数寄」(三一書房、1976)所収。

- (9) 「香道軌範」。同書は天正2年没の蜂谷宗悟筆といわれる、香道全般に関する儀式、作法、故実などを記述。国会図書館「香道伝書」に納められる写本。注(8)『日本庶民文化史料集成』第10巻所収。
- (10) 本間洋子「『香道の祖』三条西実隆についての再検討」(『武蔵大学大学院人文科学研究論叢』1号。2001)ほか。
- (11) 『古代中世芸術論』(岩波書店『日本思想大系』23巻所収。1973)。
- (12) 佐藤豊三「『室町殿行幸御傍記』と雑華室印」(図録『東山御物』所収。1976)。
- (13) この問題については、古くは野地修左『日本中世住宅史研究—とくに東求堂を中心として—』(日本学術振興会。1955)や世阿弥同朋衆説をめぐっての芸能史研究分野、さらに近年は美術史研究のなかから新たな見解が提示されてきているが、そうした同朋衆をめぐる研究の流れについては、注1の家塚論文を参照のこと。
- (14) 「古筆需要の社会的背景」(立命館大学21世紀COEプログラム「京都アート・エンタテインメント創成研究」・センズベリ日本芸術文化研究所刊、図録『天皇の詩歌と消息—宸翰にみる書式—』所収。2006)。
- (15) 古筆家の成立とその後の活動については、小松茂美著『古筆』所収「古筆家とその周辺」(講談社。1972)参照。
- (16) 「掘り出し」の行為については、かつて拙論「藤谷為賢小論—寛永文化期における一公家の活動—」(『京都市歴史資料館紀要』10号、1992)で論じたことがあるので、ここでは詳細は再説しないが、「掘り出し」や「町買いの掘り出し」に関連する史料の幾つかを掲げれば、以下の通りである。まず『大覚寺文書』(大覚寺発行。1980)下巻246号「藤谷為賢書状」には
従 御門跡様御書 忝存候、茶入返し被下候由、
未他所ニ罷有候、何も以 参上可申上候、可然

様ニ」御披露奉頼候、恐惶謹言」

三月廿三日

為賢

(追而書)

猶々、今夕、町へ罷出」事外皆々ほり出し申候
而」めつらしき道具共買申候、

とあり、また『隔奠記』寛永十五年九月六日条
「与明王院、同道、徒歩、而町中之樹木見物、町
買三色、花入壺ケ、伊賀焼也（中略）、三色予目
利、可為掘出乎」をはじめ、寛永十三年正月十
六日・同十六年四月三日・同十六年八月十三
日・同十七年五月八日条などに「町買い」や
「掘り出し」の行為が見える。

- (17) 野田泰三「東山殿足利義政の政治的位置付け
をめぐって」（『日本史研究』399号、1995）

